

# 一写一筆

〜静岡の今

## 「スポーツ王国」復活へ

野外でスポーツを楽しむ姿が目立ってきた。自然界は二十四節気の一つ「啓蟄」も過ぎ、地中に潜んでいた虫やカエルなども暖かさに誘われて穴からはい出してくる頃である。

今年はリオデジャネイロ五輪が開催されることもあって、県はスポーツ振興を、県政の目玉政策に据え、「スポーツ王国静岡の復活」を目指す。

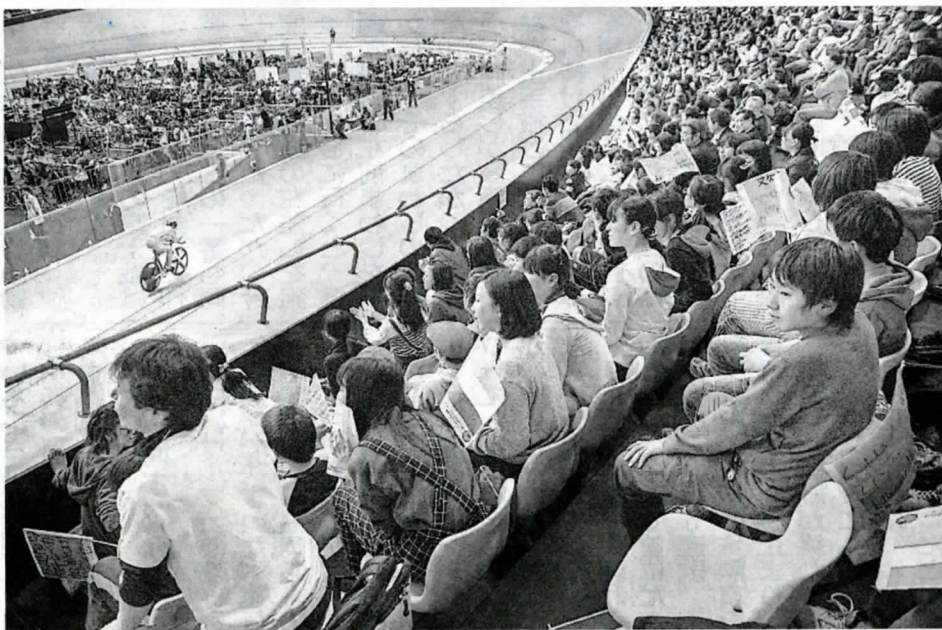
その手立てや目標を見ると、競技力向上対策として選手強化と指導者養成が図られる。県教育委員会によれば、夏季五輪の県勢出場者数は北京、ロンドン五輪とも14人。2020年の東京五輪で50人以上を目指す。過去10年間の国体総合成績は天皇杯14く26位、皇后杯13く24位。今後は男女とも8位以内を目指して強化費などを増額するとい

う。

スポーツ立県のもう一つ

の柱は、世界を見据えた「静岡」の発信である。すでに19年ラグビーワールドカップのエコパスタジアム

（袋井市）での開催が決まり、東京五輪の自転車競技の一部が伊豆市で開催されることも決まった。焼



こうした取り組みを推進するため、県は4月から知事部局に「スポーツ局」を新設。県教委の業務も一元化するが、学校体育の業務は県教委に残され、2年連続全国最下位だった小学5年男子のボール投げ改善などに取り組む。

五輪や国体で本県選手が活躍するのはうれしいが、普通の子どもたちの体力向上や高齢者のスポーツ振興もなければ「スポーツ王国」とは言えない。

広大な裾野があつてこそ、富士山頂は美しい。  
(県代表監査委員・富永久雄)

「お・も・て・な・し 応援」

—東京五輪の自転車競技会場に決まった伊豆ヶロドルーム。国際大会の観戦に地元の人たちもかけつけた伊豆市、全日写連藤田寛司さん撮影